

# 日本とフィリピンの互助慣行の比較

流通経済大学 恩田守雄

## 1. 目的

本報告の目的は、田植えなどの労力交換のユイ（互酬的行為）、道路補修などの共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理のモヤイ（再分配的行為）、冠婚葬祭のテツダイ（支援＜援助＞的行為）という日本の互助行為について（恩田,2006）、フィリピンと比較し相違点と類似点を明らかにすることである。それは東南アジア的な互助ネットワークの可能性を考察することでもある。

## 2. 方法

上記の目的を達成するため日本とフィリピンの互助関連の文献を精読し、またフィリピンで現地調査を行った。調査地点は2015年8月にミンダナオ島（ダバオ）、サマル島、ルソン島（ブラカン州、パンパンガ州）、16年3月にはルソン島（ベンゲット州、アルバイ州、南カマリネス州）、パナイ島、ギマラス島の農村や山村、漁村で地元住民への聞き取り（半構造化インタビュー）調査を実施した。なお東アジアの互助慣行は既に研究がされ（第88回日本社会学会報告「東アジアの互助慣行—日本と韓国、中国、台湾との比較—」）、本研究はその延長上で東南アジアが対象である。

## 3. 結果

フィリピンの互助慣行は日本同様近代化の過程で衰退しつつあるが、村落ではまだ伝統的な互助行為が見られる。特に親族関係という血縁の系譜を中心とした互助ネットワークが存続している。日本のユイに相当する *suyuan*（タガログ語）や *lusong*（ビサヤ語）、*alluyon*（カンカナエ語）、*aduyon*（イバロイ語）などの言葉が野菜の種まきや収穫で使われてきたが、若い人がこれらの言葉を言うことが少ないので日本も同じである。モヤイでは共同作業で *tulongan*（タガログ語）や *makipagbisug*（ビサヤ語）、*manbibindang*（カンカナエ語）、*mantitinudong*（イバロイ語）、*rabus*（ビヨル語）などが使われる。住民総出の作業は少なくボランティアとして行われる場合が多いが、山村では誰でも共同作業に加わる点で団結力は強い。作業に参加しないときの過怠金は一部で見られた。金銭モヤイ（小口金融）の *paluwagan* は *buboay*（ビサヤ語）と言うところもあるが、調査地域では共通の言葉が使われている。しかし持ち逃げがあり管理が十分でないためやめたところが多かった。その仕組みは都市では利息目的の日本の頼母子（無尽）に近似するものもあるが、地方では共済目的の積み立てが多く分配を均等にする方式が見られる。テツダイでは見返りを期待しない *tulon*（タガログ語）や *tabang*（ビサヤ語）の手助けの行為に加え、葬儀では *abuloy*（タガログ語）や *dayong*（ビサヤ語）として弔慰金を出す。村落では相互扶助（*bayanihan*）に基づくつながりや絆が健在である。

## 4. 結論

日本とフィリピンを比較すると、相違点は家族や親戚を核とした互助ネットワークはあるものの集団主義の隣保共助がそれほど強くない点が指摘できる。これは公助や自助が強く共助が弱いというよりも、また日本のように人口減少に伴う共助力の低下ではなく、個人（世帯）レベルの貧困で余裕がない状況から生まれている。ただ伝統的な冠婚葬祭では地縁関係の互助ネットワークはまだ機能している。現地調査の知見を踏まえ、東アジアとの比較も念頭に東南アジアに通底する互助慣行の構造を解明することが今後の課題である（科学研究費助成事業＜学術研究助成基金助成金＞：平成27年度～31年度、基盤研究C、研究課題「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」、課題番号15K03860、研究代表者＜個人研究＞恩田守雄）。

＜参考文献＞

恩田守雄、2006『互助社会論』世界思想社。

Onda, Morio. 2013. ‘Mutual help networks and social transformation in Japan,’ *American Journal of Economics and Sociology*, 71(3):531-564.